撮影場所：彌彦神社（新潟県西蒲原郡弥彦村）

人樹

Vol. 24

「三樹」

太宰 春台の「産語」の中に、「三樹」の話があります。

衛の国の君主が、藩という処に出かけた時
松の木の苗を植えている老父に会った。
衛公はその老人に、「あなたはいくつですか」と問うた。
老父は、85 才と答えた。
衛公は笑って、この松が大きくなって用材となった時
老父は、それを用いる事が出来ますかと聞いた。
老父は、苗を植うる手を止め、衛君の顔を視て言った。
樹木の用は百年の後に待つものです。
衛公は、これを自分が生きているうちに用いるつもりと思われるのですか。
私の死は近いが、子孫の時代の為にやっている事です。
これを聞いて、衛公は大いに恥じ、老父に謝って言った。
「私が間違っていました。あなたを私の師とさせてもらいます。」

これが有名な三樹の話です。

一年の計は穀を樹うるに如くはなし
十年の計は木を樹うるに如くはなし
終身の計は人を樹うるに如くはなし

という言葉のいわれです。

古来より日本は、農耕民族として生きてきました。
農作物は自然の力によるところが大で、人間の努力を超えた力でその吉凶が決まります。
そうした中で、我々の先祖の人達は、1日も怠る事なく昼夜を分かたず働き、そして、忍耐強く自然の恵みを待つ中で、大自然に感謝し、祈りを捧げる習慣を身につけてきたのです。

日本人が、世界のどの国よりも、勤勉で、忍耐強い民族となってきたのは、こうした風土が長い間育んできたものだと思います。
そしてその勤勉さと忍耐力こそが、日本を今日、世界有数の平和で豊かな国にしてきたのではないでしょうか。

しかし、近年の日本を見ていると、そうした日本人の本来持っていた美徳を忘れ、個人主義、刹那主義、その場しのぎの流行をあたかも、それが新しい時代のトレンドの様に騒ぎ立て、まるで勤勉が罪悪の様にとらえられている浮薄な論調におどらされている人が増えすぎている様に思えてなりません。

我々は、この日本が本来持っていた、勤勉や忍耐力をもう一度とり戻し、10 年後、100 年後の日本を考える英知と勇気を持つべきではないでしょうか。

大衆迎合、自己保身の政治や行政、教育、そして、拝金主義的経営や安逸な世相も含め、将来の日本を楽観視出来ない人も多いのではないでしょうか。
この国に残された残り時間をもっと深刻に受け止め、1人1人が、依存心を極力捨て、自立から貢献への生き方へ再び舵を切る事こそが、明るい日本の未来へとつながるのではないでしょうか。

将来を荷なう次世代の若者に、勤勉や忍耐を身につけさせてあげる事は、まさに国家百年の計の礎となるのではないでしょうか。

徳真会グループ
理事長　松村 博史